

授業概要

本演習は、心理学の見方・考え方を働かせ、専門書を読み、口頭発表の練習や討論をおこなうことを通して、子どもたちの自立的な学びを支援する授業づくりについて理解を深めたい。春期では、動機づけ（やる気）に関する、心理学の代表的な理論について理解を深める。秋期では、心理学の理論と実際の授業の関係について、授業実践を基に考えを深める。教員志望の学生はもちろん、子どもの学びやその支援に関心のある学生の参加を歓迎する。

授業計画

第1回	オリエンテーション・春期担当決め	第16回	秋期担当決め
第2回	自分のやる気について振り返る(1)	第17回	令和の日本型学校教育
第3回	好きこそもの上手なれ	第18回	子どもが自立的に学び進める学習
第4回	夢や目標をもって生きよう！	第19回	近代学校の子どもの観とその問い直し
第5回	生物の根源的な動機を考える	第20回	すべての子どもは有能な学び手
第6回	努力は自分のためならず	第21回	子どもは一人ひとり違っている
第7回	知られざる力	第22回	自己決定的学習と環境による教育
第8回	楽しさと最適発達の現象学	第23回	ICTという新たな道具立てを得て
第9回	何を指して学ぶか	第24回	教師の専門性を問い直す
第10回	自分のことをどう捉える？	第25回	授業分析の方法
第11回	「できる」はできるという信念で決まる	第26回	授業実践見学
第12回	自分の学習に自分から積極的に関わる	第27回	授業実践検討(1)
第13回	どうして無気力になるのか	第28回	授業実践検討(2)
第14回	自分や周りの人のやる気に働きかける	第29回	授業実践検討(3)
第15回	自分のやる気について振り返る(2)	第30回	秋学期のまとめ

到達目標

- ・動機づけについて、理論と実践の双方から理解を深める。
- ・授業実践について、心理学的な視点から考えることができる。
- ・リサーチや文章執筆、資料作成、プレゼンテーションのスキル、質問のスキルを磨く。

履修上の注意

- ・教員志望など、学校教育に強い関心のある学生の参加を推奨する。
- ・毎回の授業では、受講生全員が積極的に議論に参加すること。
- ・秋期に、課外に学校見学に行く可能性がある。

予習・復習

- ① テキストは毎回必ず各自事前に目を通しておく
- ② 自分の発表については、レジュメを作成する。

評価方法

授業に対する姿勢（発表準備や質疑応答への参加）80%、レポート 20%

テキスト

- | | |
|---------------------------------|---------------------------------|
| ・教科書名：個別最適な学びと協働的な学び | ・参考書名：モチベーションをまなび 12 の理論 |
| ・著者名：奈須正裕 | ・著者名：鹿毛雅治（編） |
| ・出版社名：東洋館出版社 | ・出版社名：金剛出版 |
| ・出版年(ISBN):2021年(9784491047263) | ・出版年(ISBN):2012年(9784772412490) |

授業概要

本演習では、3年次の専門演習に向けて、口頭報告・質疑応答の練習を主に行っていくものとします。特に、前近代における天皇に焦点を当て、論文・文献や史料などの探し方、レジュメの作り方なども含めて指導します。また、天皇に関わる動画を実際に視聴し、それをもとに討論をすることで、自分の疑問や意見を持つとともに、それを適切に言語化することや、他者の意見を踏まえての自説構築の練習も行います。

天皇にあまり関心がない学生もいるかもしれませんが、現代の『日本国憲法』において、天皇・天皇制のあり方は、我々日本国民の総意に基づくと規定されています。従って天皇・皇族・天皇制の将来を決めるのは、他でもない皆さんです。決して他人事ではありません。ぜひ関心を持って取り組み、理解を深めるとともに、自分の考えを持ち、他者にきちんと伝えられる力を養いましょう。

授業計画

第1回	春期ガイダンス	第16回	秋期ガイダンス
第2回	史料批判について	第17回	「天皇」号の歴史
第3回	論文・史料の探し方	第18回	皇位継承儀礼
第4回	『天皇はいかに受け継がれたか』講読①	第19回	天皇の変質
第5回	『天皇はいかに受け継がれたか』講読②	第20回	令和の皇位継承をみる 前近代史の視点から①
第6回	『天皇はいかに受け継がれたか』講読③	第21回	令和の皇位継承をみる 前近代史の視点から②
第7回	『天皇はいかに受け継がれたか』講読④	第22回	令和の皇位継承をみて①
第8回	『天皇はいかに受け継がれたか』講読⑤	第23回	令和の皇位継承をみて②
第9回	史料をみる一博物館見学	第24回	令和の皇位継承をみて③
第10回	『天皇はいかに受け継がれたか』講読⑥	第25回	学術論文講読①
第11回	『天皇はいかに受け継がれたか』講読⑦	第26回	学術論文講読②
第12回	『天皇はいかに受け継がれたか』講読⑧	第27回	学術論文講読③
第13回	『天皇はいかに受け継がれたか』講読⑨	第28回	学術論文講読④
第14回	『天皇はいかに受け継がれたか』講読⑩	第29回	学術論文講読⑤
第15回	春期まとめ	第30回	秋期まとめ

到達目標

- ・自分なりの意見を持つとともに、それを相手に適切に伝えることができる。
- ・他者の意見を尊重しつつ、自分の意見をまとめなおすことができる。
- ・古代に生まれた天皇がその後如何にして変質し存続したかを具体的に理解することができる。

履修上の注意

インターネットからの根拠不明・曖昧な情報を鵜呑みにせず、客観的根拠に基づく意見構築を行ってください。実際の受講人数などによって、シラバスを多少変更する場合があります。報告者は欠席・遅刻厳禁です。

予習・復習

各回の報告者は、必ず授業開始前までにレジュメを用意すること。
報告者以外も、テキストの報告に関わる部分を事前に読んでおくこと。
授業後は、質疑応答での意見や質問を踏まえてレジュメを見直し、期末レポートに繋げること。

評価方法

各回での報告・質疑応答での態度や、期末レポートで判断する。
レポート(40%)、報告(40%)、授業態度(20%)

テキスト

- ・教科書名：『天皇はいかに受け継がれたか—天皇の身体と皇位継承』
- ・著者名：歴史学研究会編・加藤陽子責任編集
- ・出版社名：積文堂出版
- ・出版年 (ISBN)：2019

授業概要

私たちは毎日、浴びるように情報を受け取る。一説では、江戸時代に生きた人の一生分の情報を私たちは毎日享受していると言われている。

本講義では日常の情報文化を見据えつつ、近代以降の歴史的事象から「現在」を繙いていく。またメディア論の基礎をふまえ、映像、ニュース、広告、などの具体的な素材から、日常における情報のあり方、私たちのメディア利用行動やリアリティ意識の変容など、「私たち」とメディアをめぐる問題を学ぶ。

授業の終わりに、講義を聞いて自分が考えたことを小レポートとして書いてもらう。それを踏まえ、次回の授業でフィードバックを行う。その際、積極的な意見交換を行う。

学期末レポートは、講義内容に関連する参考文献を探し出し、自己の学んだことをいかしつつ、「視覚情報」の役割としてのメリット、デメリットを踏まえ記述する。

授業計画

第1回	SNS 活用方法前編	第16回	海外メディアからみる日本
第2回	SNS 活用方法後編	第17回	コロナ渦のテレビニュース
第3回	大手メディアと個人メディアの差異	第18回	コロナ渦のSNS
第4回	フェイクニュース	第19回	「映像の世紀」の「神」の声
第5回	視覚化されるメディア 瓦版から新聞へ	第20回	自由民権運動とメディア
第6回	挿絵の役割	第21回	宮武外骨の登場
第7回	人気の挿絵家たち	第22回	プロパガンダとは何か
第8回	新聞販売促進のための漫画	第23回	戦前の子ども雑誌
第9回	輸入された視覚文化	第24回	戦前の少年雑誌
第10回	日本における写真の誕生	第25回	戦前の少女雑誌
第11回	日本における映画の誕生	第26回	紙芝居とプロパガンダ
第12回	写真小説	第27回	広告
第13回	初期アニメーション前編	第28回	桃太郎の海鷲
第14回	初期アニメーション後編	第29回	ディズニーのプロパガンダアニメ
第15回	前期のまとめ	第30回	後期のまとめ

到達目標

- ・メディアリテラシーを獲得することにより、受動的立場だけでなく、能動的な立場としての「メディア」を考えることができる。
- ・特に「絵」を使用することの利点、逆に政治的にどのように利用されたかを理解することができる。

履修上の注意

- ・授業中にノートを取り、わからなかったことについては調べてくること。
- ・中学、高校で用いた「歴史」の教科書を下敷きとし、メディアが歴史とどのようなつながりがあるのか確認する。

※進行状況により授業内容を変更する場合がある。

予習・復習

予習：授業最後に次回の予習箇所を伝える。

復習：小レポートからの疑問や不明な点を、学期末レポートに反映していく。

評価方法

- ・授業中の質問に積極的に答える。
- ・授業後に記入する小レポートの内容を重視する。
- ・授業態度 20%、授業内レポート 40%、学期末レポート 40%。

テキスト

- ・必要に応じ、適宜指導する。

授業概要

この基礎演習では、イギリスの文化、風習、歴史についての知識を深めることを通して、次年度の専門演習において必要な力を総合的に養うことを目指す。

春期には、イギリスの文化、風習、歴史全般について扱う。時には読んだ文章を批判的に分析してエッセイを書き、時には絵画等を鑑賞し、自分自身が感じたことをアウトプットする練習をする。

秋期には、主に、各自イギリスに関するトピックの中から関心のあるテーマをひとつ選び、それについて発表を行う。事前にプレゼンテーションの仕方を確認する。

ヨーロッパの一国の文化、風習、歴史に目を向けることによって、その分野の知識を身につけるとともに、日本とは異なった文化、風習に触れて、さらに広い視野に立って物事をとらえられる一助となれば幸いである。

授業計画

第 1 回	イントロダクション	第 16 回	秋期のイントロダクションと復習
第 2 回	イギリスについて：概論	第 17 回	プレゼンテーションの仕方
第 3 回	イギリスの食文化	第 18 回	アーサー王伝説
第 4 回	イギリスの 4 つの地域：概論	第 19 回	映画視聴：アーサー王関連（前半）
第 5 回	イギリスの 4 つの地域：ケルト人の地域	第 20 回	映画視聴：アーサー王関連（後半）
第 6 回	イギリスの宗教	第 21 回	児童文学
第 7 回	イギリスの階級	第 22 回	受講生の発表(1)
第 8 回	イギリスのスポーツ	第 23 回	受講生の発表(2)
第 9 回	イギリスの教育制度	第 24 回	受講生の発表(3)
第 10 回	イギリス美術：風景画の発達	第 25 回	受講生の発表(4)
第 11 回	イギリス美術：コンスタブルとターナー	第 26 回	受講生の発表(5)
第 12 回	イギリスの社会福祉制度	第 27 回	受講生の発表(6)
第 13 回	イギリスの民俗行事と風習：前半	第 28 回	予備日（未発表者のため）
第 14 回	イギリスの民俗行事と風習：後半	第 29 回	イギリスの音楽
第 15 回	春期の総まとめ	第 30 回	総まとめ

*授業の内容、進度は、ゼミ生の人数等によって若干変更されることがある。

到達目標

イギリスの文化、風習、歴史についての知識を深めることを通して、専門演習で必要となるレベルの日本語の運用力を総合的に身につけることができる。

履修上の注意

イギリスの文化、風習、歴史に興味のある人、その分野の知識をこれから身につけてみたい人であれば歓迎する。授業では日本語の総合的な力を伸ばすことを目的とし、日本語で書かれたプリントを使用するため、当然ながら英語の語学力が問われることはない。

予習・復習

日本語の運用能力を高めるために、予習として予め与えられた資料の講読、発表の準備を行い、授業後は、予習の段階で理解が及ばなかった箇所を中心にもう一度資料を読むとともに、書いた文章の不備や自分が行った発表でうまくいかなかったところを確認する。

評価方法

授業内での発表（秋期）（30%）、レポート（春期・秋期各一回）（50%）を重視し、さらに学習に対する姿勢（20%）も考慮に入れて、総合的に評価する。

テキスト

特になし。ハンドアウトを配布する。適宜、参考書を紹介する。

授業概要

本科目では講義とゼミナール形式の2つの形で進行する。扱う作品は紫式部の『紫式部日記』である。今年度の大河ドラマ『光る君へ』の主人公の日記であり現在最も注目をされている古典作品の一つといえる。是非今学生の皆さんと一緒に丁寧に読んでいき現在進行形のスリリングな体験を楽しく分かち合いたい。

各学期とも最初の数回は授業に関連する講義を行い後は学生の口頭発表となる。それぞれが感じた問題点について発表してもらいたい。三年次の専門演習に向けて、基礎的な発表の技法を身につけてほしい。

授業計画

第 1 回	前期のオリエンテーション	第 16 回	後期のオリエンテーション
第 2 回	講義：作者紫式部について	第 17 回	講義：中宮彰子の出産記録の存在意義
第 3 回	講義：紫式部日記の不思議な構造	第 18 回	講義：皇子誕生の政治的意味
第 4 回	講義：消息文と女性批判	第 19 回	講義：『源氏物語』の豪華本製作
第 5 回	講義：式部の少女時代と作家の才能	第 20 回	講義：物思いにふける作者と友人たち
第 6 回	講義：式部の恋愛と結婚	第 21 回	講義：大晦日の強盗事件の意味とは
第 7 回	講義：夫の死と『源氏物語』の執筆	第 22 回	講義：紫式部と中宮の関係
第 8 回	講義：『源氏物語』の評判と式部の出仕	第 23 回	講義：紫式部の自慢と教養
第 9 回	口頭発表のしかた／発表資料作成方法	第 24 回	講義：紫式部と道長の関係とは
第 10 回	参考文献の調べ方／論文の読み方	第 25 回	発表の工夫／発表資料作成法（上級編）
第 11 回	学生発表①	第 26 回	質疑応答の上手な行い方
第 12 回	学生発表②	第 27 回	学生発表①
第 13 回	学生発表③	第 28 回	学生発表②
第 14 回	学生発表④	第 29 回	学生発表③
第 15 回	春期のまとめ	第 30 回	学生発表④
		第 31 回	秋期のまとめ・一年の総まとめ

到達目標

- ① 『紫式部日記』について、どのように読まれてきたかどのような問題点と意義があるか理解できる
- ② 情報メディアセンターを使用したりネットで検索したりして適切な資料や論文を探ることが出来る
- ③ 分かりやすく適切な発表資料を作成し、周りにそれを効率的に発表することが出来る

履修上の注意

- ・古典文学及びその関連科目を積極的に受講してほしい。
- ・演習は学生の皆さんが主体で進行する科目なので出席が大前提になる。積極的に授業に臨んでほしい。
(※学生との相談や授業の進捗状況により発表個所や内容を変更することがある。)

予習・復習

- ・予習：初回の授業でも説明するが、テキストを事前によく読み、感じた問題点を書き出しておく
- ・復習：授業後も疑問が消えないものはそのままにせずにもう一度テキストや資料を読み解決に向けて努力する

評価方法

授業への参加度（30%）・発表内容（70%）によって総合的に評価する。

テキスト

- ・教科書名：ビギナーズクラシック日本の古典 紫式部日記（角川ソフィア文庫）
- ・著者名：山本淳子（編）
- ・出版社名：角川書店
- ・出版年（ISBN）：2009年（978-4-04-407204-9）

授業概要

近現代文学の短編と中編の名作を読み、作品に対する研究・批評の方法を身につけるように指導する。作品を読み解きつつ、そこに織り込まれた時代社会に対する認識を深めながら、それがあくまでも作家の個性を通して作中に現れているメカニズムを把握させる。それとともに、作品に込められた哲学・思想的文脈も捉えていきたい。

授業計画

第 1 回	ガイダンス1 作品研究の方法	第 16 回	ガイダンス2 作家と作品の関係
第 2 回	芥川龍之介『芋粥』を読む1	第 17 回	太宰治『ヴィヨンの妻』を読む1
第 3 回	芥川龍之介『芋粥』を読む2	第 18 回	太宰治『ヴィヨンの妻』を読む2
第 4 回	森鷗外『阿部一族』を読む1	第 19 回	三島由紀夫『真夏の死』を読む1
第 5 回	森鷗外『阿部一族』を読む2	第 20 回	三島由紀夫『真夏の死』を読む2
第 6 回	森鷗外『阿部一族』を読む3	第 21 回	三島由紀夫『真夏の死』を読む3
第 7 回	志賀直哉『クローディアスの日記』を読む1	第 22 回	川端康成『禽獣』を読む1
第 8 回	志賀直哉『クローディアスの日記』を読む2	第 23 回	川端康成『禽獣』を読む2
第 9 回	樋口一葉『たけくらべ』を読む1	第 24 回	大江健三郎『死者の奢り』を読む1
第 10 回	樋口一葉『たけくらべ』を読む2	第 25 回	大江健三郎『死者の奢り』を読む2
第 11 回	樋口一葉『たけくらべ』を読む3	第 26 回	大江健三郎『死者の奢り』を読む3
第 12 回	夏目漱石『坊っちゃん』を読む1	第 27 回	村上春樹『1973年のピンボール』を読む1
第 13 回	夏目漱石『坊っちゃん』を読む2	第 28 回	村上春樹『1973年のピンボール』を読む2
第 14 回	夏目漱石『坊っちゃん』を読む3	第 29 回	村上春樹『1973年のピンボール』を読む3
第 15 回	夏目漱石『坊っちゃん』を読む4	第 30 回	村上春樹『1973年のピンボール』を読む4
		第 31 回	まとめ 作品レポートの提出

到達目標

- ・ 作品を自身の眼で読み、主題や動機の在り処を捉えることができる。
- ・ 作品の背後にある時代・社会的文脈を調べ、読解に生かすことができる。
- ・ 第三者を説得する論理性のある文章を書くことができる。

履修上の注意

この授業は近代文学ゼミに所属する学生に向けて開かれる授業である。基本的に日本近代文学を対象として卒業論文を執筆予定の学生が受講されたい。

予習・復習

- ・ 発表担当者は必ず当該授業までにレジュメを準備し、つつがなく発表を行う。
- ・ 発表者以外の出席者も必ず作品を読み、発表者に質疑ができるように準備しておく。
- ・ 授業後は内容を見直し、作品への把握を深めつつ、レポート作成へつなげるようにする。

評価方法

期末レポート（40%）と作品の発表レジュメ（40%）、及び授業参加態度（20%）により評価する。

テキスト

前期のテキストは教員が配布する。中編作品のテキストは学生が各自で文庫本を用意する。

- ・ 教科書名：
- ・ 著者名：
- ・ 出版社名：
- ・ 出版年（ISBN）：

授業概要

本演習では、文献講読や制作実践を通じて、メディア文化研究の視点から日本のポップカルチャーについて考察を深めながら、3年次の専門演習、4年次の卒業論文執筆に向けて基礎体力を養います。

春期は、現在の日本のエンタテインメント産業を概観するために輪読形式で文献を読みます。この取り組みを通じて、エンタテインメント産業に関する知見を獲得するだけでなく、文章読解、プレゼンテーション、ディスカッションのための能力や技術を磨いていきます。

秋期は、学年末の成果物として「ゼミ生による、音楽を中心としたキュレーション・メディア」を作りたいと考えています。この取り組みを通じて、ポップカルチャーをメディア文化研究の対象として客観的に考察するための心構えや視点を磨いていきます。

授業計画

第 1 回	春学期ガイダンス	第 16 回	秋学期ガイダンス
第 2 回	文献講読(1)興行	第 17 回	企画会議(1)
第 3 回	文献講読(2)興行	第 18 回	企画会議(2)
第 4 回	文献講読(3)映画	第 19 回	企画書作成(1)
第 5 回	文献講読(4)音楽	第 20 回	企画書作成(2)
第 6 回	文献講読(5)音楽	第 21 回	企画書プレゼン
第 7 回	文献講読(6)出版	第 22 回	制作実践(1)
第 8 回	文献講読(7)マンガ	第 23 回	制作実践(2)
第 9 回	文献講読(8)マンガ	第 24 回	制作実践(3)
第 10 回	文献講読(9)テレビ	第 25 回	制作実践(4)
第 11 回	文献講読(10)アニメ	第 26 回	制作実践(5)
第 12 回	文献講読(11)アニメ	第 27 回	制作実践(6)
第 13 回	文献講読(12)ゲーム	第 28 回	制作実践(7)
第 14 回	文献講読(13)スポーツ	第 29 回	秋学期の総括①
第 15 回	春学期の総括	第 30 回	秋学期の総括②
		第 31 回	

到達目標

- 文章読解、プレゼンテーション、ディスカッションのための能力や技術を磨く。
- 企画立案から成果物アウトプットまでの一連の流れを管理、遂行する能力を磨く。
- エンタテインメント産業やポップカルチャーをメディア文化研究の対象として客観的に考察することができる。

履修上の注意

- 無断欠席をせず、ゼミ活動へ積極的に取り組むこと。
- ゼミ活動を通じて、ゼミのメンバーや教員と「良い人間関係」を構築できるよう、常に心がけること。
- 受講者数や進捗状況によって、授業計画を多少変更する可能性があることを留意しておいてください。
- メディア関係者を外部講師として招聘する予定があることを留意しておいてください。

予習・復習

- 発表や報告に際しては、レジュメやスライドなどの資料を作成すること。
- 報告者以外もテキストの報告に関わる部分を読み、疑問点などを明らかにしたうえで授業に参加すること。
- エンタテインメント産業やポップカルチャーの動向に常にアンテナを張り、授業内容の理解を深めること。

評価方法

- 授業に対する姿勢（発表準備や質疑応答への参加）80%、レポートや成果物等の提出課題 20%

テキスト

- 教科書名：『エンタメビジネス全史―「IP 先進国ニッポン」の誕生と構造』
- 著者名：中山淳雄
- 出版社名：日経 BP
- 出版年 (ISBN)：2023 (ISBN 978-4-296-00143-9)

授業概要

<カルチュラル・スタディーズ 映像社会と現代文化の解説>

映画や小説やアニメーションなどのサブカルチャー的テキストを考察し、そこに潜んだ文化的無意識を追求してゆく。サブカルチャーを現代社会を鮮明に映し出す鏡として読み解きたい。たとえば、『アナと雪の女王』におけるお姫様、クトゥルフ神話 SFにおけるロボットの進化、原発や東日本大震災と津波、原爆のキノコ雲、ゾンビ文化など、様々なテーマを探究したい。文化を反映する謎を秘めたテキストを読み解き、現代を理解できるリテラシーを養えるように指導する。

授業計画

第1回	自己紹介 ゼミの目的について	第16回	ゾンビ映画文化論
第2回	『鬼滅の刃』分析—鬼退治とは何か	第17回	『吸血鬼ドラキュラ』の文化史
第3回	竜退治の進化—『白鯨』から『ジョーズ』	第18回	女性の復讐の物語—『四谷怪談』
第4回	『バケモノの子』と『白鯨』	第19回	ボーイズラブ現象の謎
第5回	『アナと雪の女王』—アニメの変貌	第20回	ライトノベルの文化史
第6回	H・P・ラヴクラフト研究	第21回	新海誠の風景『秒速5センチメートル』
第7回	クトゥルフ神話の文化史『エイリアン』	第22回	『君の名は。』とタイムトラベル文化史
第8回	シンデレラの物語の変貌	第23回	ジブリと災害—『崖の上のポコ』
第9回	ディズニー映画の解説	第24回	ジブリと核文化—『風の谷のナウシカ』
第10回	災害と怪獣文化—ゴジラの文化史	第25回	ジブリと自分探し『千と千尋の神隠し』
第11回	『シン・ゴジラ』論—ゴジラの変貌	第26回	村ホラー映画—『犬鳴村』
第12回	ゾンビ映画と資本主義	第27回	SF映画の進化論—赤狩りの映画史
第13回	オタクの文化史—『電車男』論	第28回	ハリウッドSF映画におけるキノコ雲
第14回	妖怪文化論—『ゲゲゲの鬼太郎』	第29回	原爆とアニメ—『この世界の片隅に』
第15回	『リング』と疫病恐怖	第30回	都市伝説の文化論
		第31回	年度末の総括

到達目標

- ・学生が様々な現代的トピックスを文化テキストの解説を通して分析する教養を備えることができる。
- ・学生が現代社会を把握するためのメディア・リテラシーを習得することができる。

履修上の注意

楽しい授業にしてゆきたいので、積極的な参加を望みたい。資料を配布するのでファイルを持参のこと。普段から関心をもって本を読むように心がけてもらいたい。

予習・復習

配布した資料は事前に予習として必ず読み、授業後に再度読み直すこと。

評価方法

学期末レポート（60%）、提出物および授業中の発表や発言（40%）で評価する。

テキスト

- ・教科書名：『ゾンビの帝国: アナトミー・オブ・ザ・デッド』
- ・著者名：西山智則
- ・出版社名：小鳥遊書房
- ・出版年 (ISBN)：2019年 (978-4909812124)

授業概要

本演習は 3 年次からの専門演習に向けての「予行演習」と位置づけられる。したがって、本を読むこと、そして口頭発表の練習や質疑応答に重点が置かれることになる。

テキストは次の 2 冊を使用する。

① 鹿野政直『近代国家を構想した思想家たち』

近代の日本思想を学んでいく。毎回日本の代表的な思想家を取り上げ、「国民」の形成、世界と日本、変革の思想などの問題を考えていきたい。

② 保阪正康『戦争の近現代史』

近代日本が経験した戦争の歴史を振り返ることを通して、その教訓を学ぶとともに、現代世界が直面する戦争やテロにいかに向き合っていくべきなのかを考えていきたい。

授業の進め方としては、受講者各人に割り当てをした上で、担当箇所の発表をしてもらう。読書の習慣や口頭発表の作法を身につけてもらえるようキメ細かく指導する。

授業計画

第 1 回	春期の進め方の説明	第 16 回	秋期の進め方の説明
第 2 回	『近代国家を構想した思想家たち』の講読①	第 17 回	『戦争の近現代史』の講読①
第 3 回	『近代国家を構想した思想家たち』の講読②	第 18 回	『戦争の近現代史』の講読②
第 4 回	『近代国家を構想した思想家たち』の講読③	第 19 回	『戦争の近現代史』の講読③
第 5 回	『近代国家を構想した思想家たち』の講読④	第 20 回	『戦争の近現代史』の講読④
第 6 回	『近代国家を構想した思想家たち』の講読⑤	第 21 回	『戦争の近現代史』の講読⑤
第 7 回	『近代国家を構想した思想家たち』の講読⑥	第 22 回	『戦争の近現代史』の講読⑥
第 8 回	『近代国家を構想した思想家たち』の講読⑦	第 23 回	『戦争の近現代史』の講読⑦
第 9 回	『近代国家を構想した思想家たち』の講読⑧	第 24 回	『戦争の近現代史』の講読⑧
第 10 回	『近代国家を構想した思想家たち』の講読⑨	第 25 回	『戦争の近現代史』の講読⑨
第 11 回	『近代国家を構想した思想家たち』の講読⑩	第 26 回	『戦争の近現代史』の講読⑩
第 12 回	『近代国家を構想した思想家たち』の講読⑪	第 27 回	『戦争の近現代史』の講読⑪
第 13 回	『近代国家を構想した思想家たち』の講読⑫	第 28 回	『戦争の近現代史』の講読⑫
第 14 回	『近代国家を構想した思想家たち』の講読⑬	第 29 回	『戦争の近現代史』の講読⑬
第 15 回	春期の総括	第 30 回	秋期の総括

到達目標

- ・本を読み、内容を的確に理解できる。
- ・レジュメ（発表資料）を作成したうえで、口頭発表を行うことができる。
- ・自分の意見を述べながら、議論ができる。

履修上の注意

- (1) 日本史、西洋史、東洋史、思想史関係の授業科目を積極的に受講すること。
- (2) 演習は学生主体で行われるものなので、全出席することが前提である。無断欠席は認めない。

予習・復習

- (1) テキストは毎回必ず各自事前に目を通しておく。
- (2) 発表に際しては、レジュメを作成する。
- (3) 授業で取り上げたテキストの箇所を読み返して、内容の理解を深める。

評価方法

授業に対する姿勢（発表準備や質疑応答への参加）80%、レポート 20%

テキスト

- | | |
|----------------------|-------------------|
| ・教科書名：近代国家を構想した思想家たち | ・教科書名：戦争の近現代史 |
| ・著者名：鹿野政直 | ・著者名：保阪正康 |
| ・出版社名：岩波ジュニア新書 | ・出版社名：幻冬舎文庫 |
| ・出版年（ISBN）：2005 年 | ・出版年（ISBN）：2023 年 |

授業概要

本演習では3年次の専門演習に向けた準備をする（専門演習では4年次の卒業論文に向けた準備をする）。したがって、特定の言語現象を見定め、分析し、調べ物をする、それを発表資料にまとめ、口頭発表をすることといった、言語研究の基礎を身につけることを目標とする。前期では、古代日本語から歴史的な日本語の意味・文法を振り返る。そして、現代日本語学の研究を認知言語学のアプローチによって紹介する。受講者には時々それに基づく小課題&簡単な発表を行ってもらう。また後期の発表に必要な研究方法や情報収集の仕方なども扱う。後期では、受講者の発表が中心となる。

授業計画

第 1 回	オリエンテーション	第 16 回	前期の復習
第 2 回	認知言語学の基礎	第 17 回	「色」とことば
第 3 回	「ものの見方」と意味・文法	第 18 回	ことばのダイナミズム
第 4 回	カテゴリー化	第 19 回	言語の普遍性と相対性
第 5 回	スキーマ化	第 20 回	後期発表のチュートリアル
第 6 回	イメージ・スキーマ/意味のネットワーク	第 21 回	後期担当者発表(1)
第 7 回	メタファー	第 22 回	後期担当者発表(2)
第 8 回	メトニミー	第 23 回	後期担当者発表(3)
第 9 回	概念メタファー	第 24 回	後期担当者発表(4)
第 10 回	現代日本語の用例の収集と整理の方法	第 25 回	後期担当者発表(5)
第 11 回	前期担当者発表(1)	第 26 回	後期担当者発表(6)
第 12 回	前期担当者発表(2)	第 27 回	後期担当者発表(7)
第 13 回	前期担当者発表(3)	第 28 回	後期担当者発表(8)
第 14 回	前期担当者発表(4)	第 29 回	後期担当者発表(9)
第 15 回	前期のまとめ	第 30 回	後期のまとめ

到達目標

- ・書かれた言語資料を集めて分析することができる。
- ・自分自身で日本語学の分野の発表の基礎的な準備をすることができる。
- ・自分の関心のある言語現象について理論に基づき論じることができる。

履修上の注意

「日本語の文法、日本語学（概論）、日本語学（各論）、日本語コミュニケーション、言語学、社会言語学」などの日本語学・言語学系の科目のうち少なくとも一部を既に履修しているか、並行して履修してもらいたい。特に「日本語の文法」は必須なので、未修なら並行履修する必要がある。

予習・復習

授業は、各自が発表準備を間に合わせることを前提としている。各自発表に間に合うように努力されたい。発表の順番などは臨機応変に決める。受講者の人数次第で講義の回数や発表の回数を調整する。

評価方法

発表（40パーセント）、前期・後期レポート（40%）、その他受講態度等（20パーセント）で評価する。

テキスト

- ・教科書名：『学びのエクササイズ 認知言語学』
- ・著者名：谷口一美
- ・出版社名：ひつじ書房
- ・出版年（ISBN）：2006年（978-4894762824）

授業概要

この基礎演習は西洋の歴史について社会の仕組みや政治の展開を踏まえつつ、人々がどのように生活し、何を考えていたのか、それが時間の流れと共にどのように変わっていったのか、主にキリスト教やジェンダーに関わる事柄から考える。春期は宗教としての成立から始め、中世に聖人崇敬や聖遺物崇敬の発展で政治や経済にも影響を与えたこと、近代に入って宗教と政治の切り離しが進んだことなど、出来事の経過とその背景を様々なテーマで学習する。秋期はジェンダーに関連する問題を中心的に扱う。これらを通じて、次年度の専門演習で必要な力をつけることを目的とする。

授業計画

第 1 回	イントロダクション	第 16 回	秋期のイントロダクションと復習
第 2 回	キリスト教の拡大	第 17 回	プレゼンテーションの方法について
第 3 回	国家と宗教	第 18 回	ペストとジェンダー表象
第 4 回	教会改革	第 19 回	教育とジェンダー
第 5 回	中世修道会	第 20 回	科学とジェンダー
第 6 回	12 世紀ルネサンス	第 21 回	福祉職とジェンダー
第 7 回	神判から証人尋問へ	第 22 回	映画視聴：「薔薇の名前」(前半)
第 8 回	13 世紀司牧革命	第 23 回	映画視聴：「薔薇の名前」(後半)
第 9 回	歴史と記憶	第 24 回	受講生発表
第 10 回	宗教改革	第 25 回	受講生発表
第 11 回	民衆運動・民衆文化・モラルエコノミー	第 26 回	受講生発表
第 12 回	市民結社	第 27 回	受講生発表
第 13 回	ナショナリズム	第 28 回	報告予備日受講生発表
第 14 回	帝国主義論	第 29 回	グローバル・ヒストリーとジェンダー
第 15 回	春期のまとめ	第 30 回	総まとめ

到達目標

- ・古代から現代まで幅広い時代の研究について講義を聞き、自ら文献を読むことで新しい知識を学ぶ。
- ・学んだこと、読んだものの要旨をまとめることができる。
- ・あるテーマについて自分の意見を持ち、それを適切に表現できるよう、課題を通じて文章の書き方やプレゼンテーションの方法を身につける。

履修上の注意

- ・「西洋史入門」「西洋史概説」、その他一つでも西洋に関係ある科目を履修していることが望ましいが、履修していなくても受講可能である。
- ・欠席、遅刻、早退の際は事前に教員に連絡し、了解を得ること。

予習・復習

- ・事前に渡すテキストをよく読み、わからない語句は意味を調べておく。
- ・テーマについて疑問点、ディスカッションしたいことを明確にして授業に臨む。
- ・授業の際はノートを取り、終了後はノートを見直して内容を復習する。

評価方法

春期末に課すレポート、秋期の発表、受講態度（20%）を総合して評価する。

テキスト

使用しない。資料は授業内で適宜配布する。